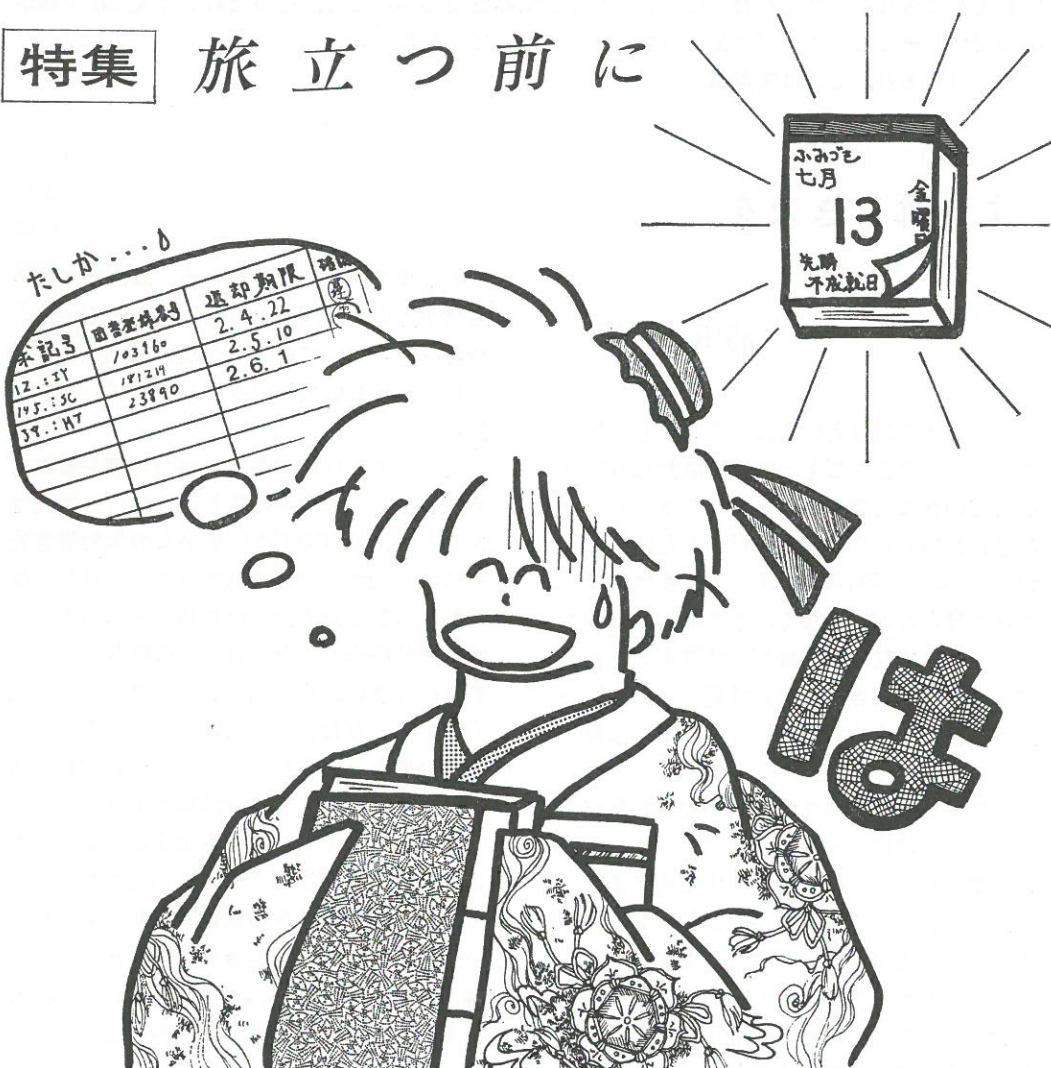


KOΣMOΣ

コスモス No. 90 1990 夏

特集 旅立つ前に



奥田美智子さん画 (文学部中国哲学文学科1年)

特集

旅立つ前に

—すてきな旅を創るのは、あなた自身です—

“旅” 皆さんは、この言葉から何を連想されますか？ 夢，ロマン，思い出，出会い，別れ，感傷。きっと，いろいろな旅の思い出があるはずです。そう，人生そのものを旅になぞらえることも多くあります。4年生や短大の2年生は，今，人生の大きな選択を目の前にして期待と不安が交錯していることでしょう。1年生は，入試という大きな関門をくぐり抜けた解放感も薄れ，少し落ち着きを取り戻したころだと思えます。そんな皆さんに，私達のちょっと先行く旅人4人から，あったかメッセージをいただきました。

感受性が強く，好奇心旺盛な若いときの旅ほどすばらしいものではありません。人生という大きな旅をすてきなものにするために，いい旅をしてみませんか。でも，そのためには入念な準備が必要です。そんなとき，図書館は力強い味方になってくれるはず。

旅のはじまり，それは図書館。

よき師よき友を

浦田 誠親

大学4年の記憶といえば，くる日もくる日も学校の図書館にこもって卒論のための勉強をしていたことである。友人たちは「あいつに会いたいのなら図書館に行け」と言っていたらしい。世間知らずで不器用な私は就職のことはほとんど頭になく，秋になって気がついた時には主な就職先は募集を終えてしまっていた。取り残された思いで駅のベンチに一人座り，電車をやり過ごしながら多少は寂しい思いも味わった。

自信もなく消極的な気持ちで就職したが，結果として国際ジャーナリストの道を歩むことになった。入社後4年足らずで西ドイツに派遣された。フランクフルトからボンに向かう列車の車窓からラインの景色をながめつつ「僕はもうこれで死んでもよい」と本当に思った。学生時代，登張正實先生や大塚金之助先生が多くを語って下さったドイツー憧れのドイツーがそこにあったからである。

その後アフリカ大陸を含め，おおげさにいえば世界を駆け回るような人生をおくった。後ろを振り向いている暇がない報道の世界で毎日，新しい未知のページをめくっていた。

その中で私はいつもひとつの言葉を噛みしめていた。「過去を顧みる人は半白の老人である」と，夏目漱石が「野分」の中で道也先生に語らせた言葉がそれである。「野分」は敗戦から1年ほどたった17歳の時に読んだ。暗い時代を過ごした私は，その時から過去を振り返るまいと決心していた。ひたすら前に向かって走りながら，これでよいのだと自分に言い聞かせてきた。だからいつまでたっても，過去を語ることに躊躇がある。

そうはいっても，誰にも過去があり原点がある。まだまだ途中ながら，あえて振り返ってみると，私の人生の旅は大学時代の先生や友人に負うところが大きい。学生諸君，よき師と友を得ているか。そこのところを確かめたら，あとはまっしぐらに進みたまえ，といいたい。

(文学部教授 うらた・のおちか)

写真からの旅

太田 邦夫

15年ほど前から、ヨーロッパの片隅、それもいま話題になっている東ヨーロッパの村を訪ねる旅をかさねている。有名な歴史の本や小説、紀行文を読んだから行くのではない。ハンセンという建築家が書いた本の、たった一枚の写真、北ロシアの木造教会に惹かれて、まず近くのレニングラードに行き、帰路ポーランドやチェコスロヴァキアを廻ったのが病みつきになったのである。

当時の日本のガイドブックには、国際線が連絡する大都市しか、東ヨーロッパの旅の情報はない。かろうじて地方の事情まで書いてあったのが誠文堂新光社の「世界地理風俗大系」。写真が足らなくて、第二次大戦後、わずかに旅行を許された進歩派の学者や芸術家の素人写真をのせているのが面白く、それでいてその人達の若い行動力に感心させられたりしたものだった。

まず安全な大都市から始めたわたくしの東ヨーロッパの旅も、現地の新本、古本とりまぜて売っている本屋で得た資料をもとに、だんだんと地方の建物や集落を中心にルートを選ぶようになった。しかし、見た途端そこに行きたいと思わせる写真ほど、どこにそれを撮った村や町があるのかわからない。ちいさな場所ものっている地図がないのだ。芸術的な写真なら、撮影の場所も時間も詮索すべきものでなかろうが、旅のリアリズムに徹するには、それでは困るのである。

限られた旅程のなかに、どれだけおおくの見どころを盛り込むか、こうした予備調査の時間は、いつしか実際の旅の日数を上回るようになった。それも楽しみではないかと羨んでくれる友人もあるが、なんとなく心空しい。期待どおりにいかず、むしろ意外なこと

が起きるのが旅の神髄ではないか。そう思っ
て、最近では見たいものの数をへらし、ほか
は一切切切コピーにとって持っていくだけに
している。ホテルのフロントとか、白タクの
運転手がそれはここだといってくれたらしめ
たもの。コピーの出来がいいと、訪ねた先で
それがいい土産になる。残念がるのがなにも
無いようにするのが、旅を楽しむひとつの
方法であることが、やっとわかってきた此頃
である。

(工学部教授 おおた・くにお)

環境に慣れると いうこと

山田八千子

今までと別の環境に入ったときに、簡単に
その環境に慣れるかどうかというのは、人によ
って様々であると思う。新しい学校や職場に
入ったときでも、ほんの一月も経たないうち
に、まるで一年も前からそこにいたような存
在感を持つ人もいる。その一方で、新しい環
境になじむために非常な努力をかけても、な
かなかまわりの人達となじめないという人も
いる。環境の変化に強いというのは、その人
が順応性、柔軟性を持っているともいえるの
で、好ましいようにもみえる。しかし、環境の
変化に強いのが、単に環境に染まりやすく、
たやすく他人に合わせられるという性格から
くるのだとすれば、少々情けないといえよう。
これに対して、新しい環境になじみにくいとい
うのは、要領の悪さを示すようにみられがち
である。ところが、そのように変化に敏感に
対応できるというのは、少くとも感受性が
強いということはいえるであろう。そして、
その人が創造的な仕事に就いているならば、
感受性の強さは彼または彼女にとってかけ
がえのないものである。

環境になじみ易いかどうかは、その人のも
のの受け取り方によって、プラスにもマイナ

スにもなる。どちらかがより望ましいとは断定できない。ただ、新たな職場等で活動することは、その職場に入る瞬間においては一種のエイリアンであるが、その瞬間を過ぎれば職場という共同体の構成員となることである。

「郷に入れば郷に従え」ともいう。この考えは、旅行者のように、その共同体の構成員といえない者には役に立つかもしれない。しかし、共同体の側からみれば、新たな構成員のコミットによって、今までの職場とはどこか異なったものになっているはずである。自分の環境の変化にとまどうときに、受け入れ側も又変化していることを意識してみるのも面白いかもしれない。

(法学部講師 やまだ・やちこ)

旅のすすめ

大藏雄之助

昭和37年に私は31歳でイギリスに赴任した。東京からロンドンまで38時間掛かった。戦争中に日本の植民地だった台湾にいたことがあり、戦後アメリカ軍占領下の沖縄に取材で滞在したことがあったが、本当の外国は初めてで、すべてがおもしろかった。

出発に先立って学究的な先輩が「ロンドンに行ったら自動車などに目を奪われないで、ブリタニカ百科事典を買って勉強したまえ」と忠告してくれた。当時、日本ではボーナスを全部はたいてもブリタニカには手が届かなかったのに、イギリスでは1か月の月給で十分だった。しかし、同じくらいの金額で中古車を買えた。私は、ブリタニカは図書館で読むことができるし、将来お金ができてから求めることも可能だが、体験は買うことができないと考えて、おんぼろ自動車を手に入れてイギリス国内はもちろん、ヨーロッパ中を旅行し、4年後にTBSに借金の山を作って帰国した。(さいわい日本の所得水準が急上昇し

たので、私はたちまち借金を返済したばかりか、めでたくブリタニカも購入することができた。)

短期間アメリカを観光旅行した人のことをアメションとからかうことがあるが、私は、It is better than never. だと思う。特に、感受性の強い、若い時の海外旅行は有益である。年をとるとこまめに見学するのがおっくうになるし、珍しいものに接しても余計な分別があって感動しない。またリュックサックを担いで回ることもできず、体面上あまりひどい安宿に泊まるわけにもいかない。(日本の普通の会社ではまだ長期の休暇を取ることは難しいから、学生時代の夏休みは貴重だ。お土産をやめて1日でも長く海外生活を！)

通過しただけでも誰でもその土地に関心を持つ。私の心に残る世界八景は次の通り。ノヴゴロドの暮雪、サン・フアンの帰帆、サン・マリノの秋月、エアズ・ロックの夕照、コヴェントリーの晩鐘、ノルド・カップの落雁、ルクソールの晴嵐、ドゥブローヰクの夜雨。

(文学部教授 おおくら・ゆうのすけ)

本文中に出てきた図書のうち下記のものは図書館に所蔵されております。

夏目漱石『野分』 漱石全集第2巻 (岩波書店)

他各種全集に所収

The New Encyclopaedia Britannica

全32巻 (第15版・1982年) 他各版

《表紙の絵》

今年度は表紙のアイデアを広く公募することにしましたが、その採用作第1号がこの作品です。作者の奥田美智子さん (中哲1年) は、高校時代、図書委員をしていたそうです。そのときの経験が爽やかに描かれているのではないのでしょうか。

皆さん、返却期限をお忘れなく！

編集委員が勝手に選んだ たびの本ガイド

どこへ出かけようかな

地球の歩き方 <海外旅行のガイド>

ダイヤモンド社 (白, 朝)

なお白山の視聴覚室には、ビデオテープもあります。

Michelin Green Guide <英語版・海外旅行のガイド> Michelin (白)

エアリアガイド <国内及び海外旅行のガイド> 昭文社 (白)

JTBのポケットガイド <国内旅行のガイド> 日本交通公社 (白)

Uガイド <国内旅行のガイド> 昭文社 (白)

ブルーガイドパック <国内旅行のガイド> 実業之日本社 (白, 朝)

アルペンガイド <国内の登山・ハイキングのためのガイド> 山と溪谷社 (白, 朝)

別冊るるぶ愛蔵版 <国内各地の観光名所を案内> 日本交通公社 (朝)

史跡をたずねて各駅停車 <鉄道による国内史跡めぐり> 鷹書房 (朝)

埼玉の観光案内 埼玉県商工部商業観光課編 (朝, 工)

旅の雑誌

旅 <月刊・わが国で最も古い旅行雑誌> 日本交通公社 (白, 朝, 工)

新ハイキング <月刊・誰でも歩けるコースを紹介> 新ハイキング社 (白)

山と溪谷 <月刊・登山関係の分野では世界最大の発行部数> (白, 朝, 工)

岳人 <月刊・登山の研究・情報誌> 東京新聞出版局 (白)

JTB時刻表 <月刊・旅行に関する数字がぎっしり> 日本交通公社 (白, 朝, 工)

トーマスクック ヨーロピアン タイムテーブル <月刊・英語版鉄道時刻表> (白)

社会に旅立つ前に

働くことの意味 清水正徳 岩波新書 1982 (白, 朝, 工)

職業と人間形成 平田哲・奈良昂編 日本YMCA同盟出版部 1983 (白)

男と女 変わる力学 一家庭・企業・社会一 鹿嶋敬 岩波新書 1989 (白, 朝, 工)

テキスト 現代女性読本 神田道子他編 三省堂 1987 (白)

こんな資料もあります

日本の企業集団 産業動向調査会編

1. 三菱グループ編

2. 三井グループ編

3. 住友グループ編

以下続刊 (白, 朝)

外国会社年鑑 日本経済新聞社 (白)

特殊法人総覧 行政管理局 (白, 朝)

ダイヤモンド会社要覧 ダイヤモンド社

全上場会社版・非上場会社版 (白, 朝)

理工学系大学院案内 東京図書編集部編 東京図書 (工)

国家試験・資格試験全書 自由国民社 (白, 朝, 工)

受験ジャーナル (月刊・公務員志望者向け雑誌) 実務教育出版 (白, 朝)

受験新報 (月刊・各種国家試験のための受験指導誌) 法学書院 (白, 朝)

(白)(朝)(工)は所蔵館をあらわします。

貴重書から

ボズウェルの 『ジョンソン伝』

——1791年のその初版本——

神田 孝夫

ジェイムズ・ボズウェル (James Boswell, 1740-95) の『サミュエル・ジョンソン伝』 (The Life of Samuel Johnson) は、英国に生まれたあまた数ある伝記の中のその白眉、最大傑作として聞こえている、有名まことにこの上もない伝記である。

その主人公、サミュエル・ジョンソンは十八世紀中葉の英国にその雷名を轟かせた一大文豪。大学を卒業してもいぬのに、オックスフォード大学からは再度にわたって学位を贈られ、貴族でもないのに最後はウェストミンスター寺院に葬られたと言え、ほぼ見当もつくであろう。かれが独力でよく初めて本格的な『英語辞典』を完成したことは、今日も多くの人々の知る所だし、比較的近年あの T. S. エリオットがあらためて、批評家また詩人としてのジョンソンに注意を促したことを知っている人々もいよう。

だが、ジョンソンの著作自体となると、これが専門の学者研究者たちは別として、今日一般にはよほど馴染みの薄いものになっているのはまず確かだろう。にも拘らず英米ではジョンソンの威名はなお高く、その面影の彷彿として浮かんでくる趣きさえあるのは、他ならぬボズウェルのこの『ジョンソン伝』の力によると言っても過言ではあるまい。実際それは十九・二十の両世紀を通じて英米では、ひろく長く愛読されてきたのであった。

その初めて世に現われたのは、ジョンソンの没後まもない1791年のことであったが、早くもその二年後の1793年には、これが増補新版たるその第二版が現れた。1799年、著者ボ

ズウェルは既に故人となっていたが、著者の指示に従いその意を受け継ぐ人の手で、その第三版が新刊せられ、同じ人の努力でさらに次ぎ次ぎ版を重ねて、1811年にはその第六版までもが世に出た。

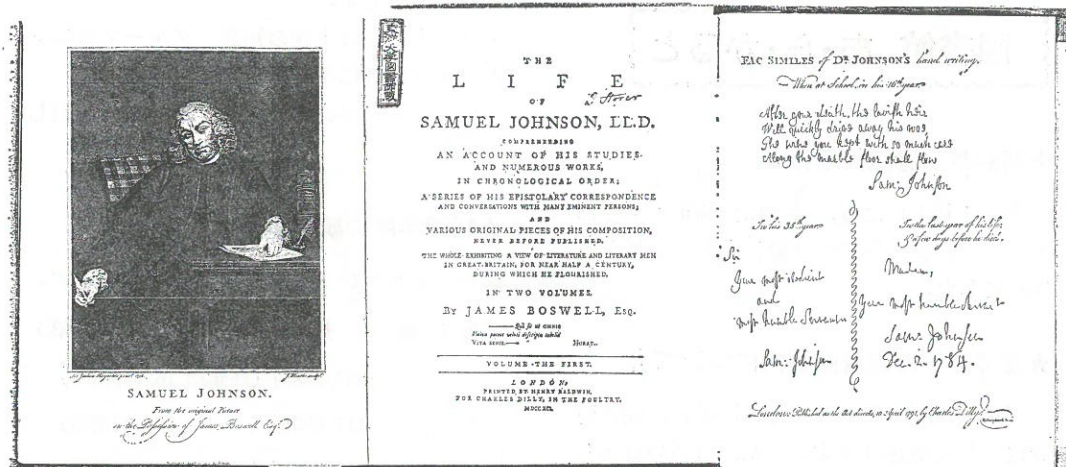
ここで一寸一段落だが、十九世紀中葉以降も、その新編新版を称するクローカーの手に成る版本——これはその編者に対する手酷しいマコーリーの書評を喚んで喧しいものであったが、しかしそこでマコーリーは『ジョンソン伝』自体は実は一あって二のない名伝記だと激賞している——その他が現われ、1900年前後になると、折から始まる英米の大手出版書肆が競って企画発刊しだした、比較的廉価で入手しやすい名著シリーズ的な叢書の中に、ボズウェルのこの『ジョンソン伝』はたいてい収まり、ひろく世に出廻った。しかもそれらは刷を重ねて続いたから、今日までに世間に流布した本書の数は非常なもので、殆んど無数と言ってよからう。

一方その間、これは専門学者の手による、初期の諸版を校合して信頼できる校訂本を提供する努力も始まり、それは益々精密化して第二次大戦後にまで及び、そういう長期の努力に加えて詳注を附した『ジョンソン伝』も、また今日世に通行している。

さらにこの約半世紀間には、歴大ないわゆる「ボズウェル文書」の発見により、従来ともすれば軽く見られがちであったボズウェルについての評価は一変、類い稀な伝記作者として異常な才能への敬意は深まり、近年はその方面から『ジョンソン伝』を見直す動きも旺んなようだが、いずれにしても、どこを一寸拾い読みしても、とにかく愉しく面白いのがこの伝記なのである。

さてここに紹介するのは、以上のような歴史を辿ってきたボズウェルの『ジョンソン伝』のその初版、1791年版である。

十八世紀の本であるから、それが堅固な革装の二巻本であるのは当然として、嬉しいのはこの初版本は、直ぐあと続く第二版、第三版が八つ折本であるのと違って、それよりもよほど大きい、ずっしり部厚い四つ折の二冊



巻頭の銅版画

その右のタイトルページ

下巻末のジョンソン筆跡

本（縦約26.5㎝、横約20.0㎝）であること、しかもその巻首には立派なジョンソンの肖像画が銅版画で入っていることである。

この原画は、ジョンソンと非常に親しかった肖像画の大家、サー・ジョシュア・レノルズが1756年、あの『英語辞典』を完成した直後のジョンソンの姿を描いたもので、レノルズは長くこれをわが手許に留めていたが、のち非常な好意からこれをボズウェルに譲ったという曰くつきの画。さてこそボズウェルはこれを銅版画に作らせてわが『ジョンソン伝』の巻首に掲げたのであった。図版の文字、サムエル・ジョンソンというこの画のキャプションの下字は、よく読めないが、実は《From the original Picture/in the Possession of James Boswell Esq.》とあるのである。

なおまたこのレノルズは、ジョンソンとは切り離せないあの有名な「文学クラブ」を創めた主唱者でもある。ボズウェルのような若造はここにはなかなか入れて貰えなかったが、よほど程へて会員になることを許されたのだが、ボズウェルはまたボズウェルで、ここから『ジョンソン伝』の材料をたっぷり仕入れたことは言うまでもなく、かれがこの伝記の劈頭を、レノルズへの献辞に当てているのはゆえなしとせぬ。

初版本を見ると、成程とよく分てくることもある。いまのレノルズへの献辞のあとは、直ぐ引続いて自分の「序」とそして「両巻の内容のアルファベット順の表」と銘うつ十数頁に及ぶものが載っている。これは今日ならインデックスとして巻末に廻される体のものだが、それが巻頭に上のように題されて載っていることなどがそれである。

ボズウェルの『ジョンソン伝』の本文は、部や章の区分一切なく、ジョンソンの誕生から死までを年代順に、ただ書き綴ったものであるのは、よく知られた事実であるが、初版本のように上のような内容表が巻頭についていると、まさに目次代りで、ジョンソンに関する巨細の事実、これを用いて容易に拾い出して読めるように出来ているからである。著者は案外、そのような読まれ方を本書の読者に認めていたのかとも思えるし、本書の流布本中には、なにぶん長大な本文だから適宜抜粋したものも少くないが、これは必ずしも不当な処置とは言われないと実感させられるのも、初版本を覗いた功德か。

（文学部教授 かんた・たかお）

（編集者注 本書の請求記号；K930, 23: BJ-2: 2）

図書館 あ・ら・かると

★新館長・分館長紹介★

今年4月1日より、館長に山崎正巳文学部教授、朝霞分館長に石井敦社会学部教授が就任しました。

★夏休み中の図書館利用について★

夏休みの間、各図書館とも開館日、開館時間などが変更されます。また、資料の貸出しについても期間、冊数が通常と異なります。詳細は各館の“夏休みのしおり”や掲示等をご覧ください。

どうぞ、大いにご利用下さい。

★白山知る知る見知る★

・最新の各種旅行ガイドブック・日本全国2万5千分の1の地図を購入しました。詳細は本文5ページに載っています。夏休みの旅行計画に役立ちますこと間違いなし!!

★朝霞知る知る見知る★

・4月2日から3週間に渡り百人一首今昔展が開かれました。これから貴重書室の有効利用を考えていますので乞御期待
・留学生コーナーが3Fより2Fに引越!!
現在蔵書150冊、これから増々充実します。

★工学部知る知る見知る★

・カウンター寄りの書架に“学祖井上円了関係コーナー”を設けました。一度は見てみる価値あり...!
・2Fロビーに軽読書コーナーが出来ました。またビデオテープの館内視聴と館外貸出しを実施しております。疲れた頭を休めるの

に最適な所です。

・“三人よれば文珠の知恵”グループでのレポート作成等に第2閲覧室をどうぞ。

以上詳細についてはカウンターまでお越し下さい。

★1989年度の統計から★

図書館の現況の一端を数字でご紹介します。

表1 蔵書冊数 (90. 3. 31現在)

白山	537,288冊 (昨年比 16,755冊増)
朝霞	117,680冊 (同 10,645冊増)
工学部	119,927冊 (同 4,965冊増)
計	774,895冊 (同 32,365冊増)

表2 所蔵雑誌総タイトル数

白山	7,952	朝霞	1,300	工学部	2,805
----	-------	----	-------	-----	-------

表3 館外貸出総冊数

白山	40,039	朝霞	19,131	工学部	19,702
----	--------	----	--------	-----	--------

学生ひとりあたりの貸出冊数は平均約4冊となります。あなたは平均以上?それとも...

★編集後記★

1990年度のコスモスの年間テーマは、「図書館の新しい使い方の提案」です。図書館というと、何か重苦しいものを感じる人が多いようですが、もっと気軽に利用してほしいと考えています。そのためのヒントにしてもらえればと思います。

それから、今年度の目玉企画は表紙のアイデアを公募したこと。今号の表紙は、編集委員の想像をこえた力作を選ぶことができました。次号以降も学生の皆さんのアツと驚く作品を期待しています。

委員一同



TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN **KOSMOS**

1990 夏 (No. 90) 1990年7月7日発行 編集: コスモス編集委員会 発行人: 山崎正巳 発行所: 東洋大学 附属図書館 〒112 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. 03(945)7314 ©東洋大学附属図書館 1990